

小谷城址の研究(4)

——比良山岳寺院と山城——

丸山竜平・深貝佳世*

A Study of the Ruins of Odani-jo (4) :
Temples and Castles in the Hira Mountains

Ryuhei MARUYAMA and Kayo FUKAGAI

1. はじめに

滋賀県下の中世城郭数はおよそ1300箇所を数える。それらが中世も最後の時代である西暦1500年代のおよそ100年間に築かれた城郭数であることを考えれば、実に膨大な数にのぼるといわざるを得ない。

この城郭の中には、平地に築かれた「城館」と山尾根上に築かれた砦、あるいは山城と呼ばれるものの二者が多数を占めるが、ほかにも山上や山腹に営まれた寺院が要塞化し、その一角に接して城郭遺構(縄張り)を築くものなども含む。

また、信長の近江侵攻以前に属するところの佐々木六角氏や京極氏、あるいは浅井氏の頃に築かれた中世戦国期の山城から柴田勝家と秀吉との覇権争いである賤ヶ岳合戦によって余呉町、木之本町を中心に湖北に築かれた多くの近世初頭の山城までを含んでいる。

このためこれら城郭は多種多様であって単純ではない。

それだけに、城の縄張り(城の構造)から、築城の年代や築城者の権力の系譜、あるいはその勢力の経済力や身分関係などを探ることが可能であり、その地域の歴史をより豊かに描くことができる。

城郭の中でも比較的単純な平地館城とは異なり、山城は複雑な構造を取るものが多い。かといって、寺の構や屋敷の構とは明確に一線を画している。そのほかとを別つ城構えとは、1. 背後、あるいは尾根筋からの敵勢を防ぐために築かれた堀切と縦堀。2. 郭(平坦地)を囲み、防御するための土塁と横堀。3. 敵の直接侵入を防ぐ為の木戸口の複雑化(虎口の発達)。4. 山腹斜面の峻険さを増すための切岸、などが指摘し得る。上記4項目を満す山城は戦国時代でも末期のものであり、特に土塁が郭を完全に囲み、かつその幅、高さが均一に仕上げられているものはこの時期に属する。

比良や比叡の山岳寺院や高島七ヶ寺においてもどれ一つとして城構えを取る寺院はない。しかし、寺院の一部において、それもごくわずかに上記4項目の何がしかを備える寺院が存在する。そこに寺院の城塞化が窺える。

他方、平地の城館においては土塁と濠の存在が館主の存在を物語る程度であるが、土塁を持たないそれでいて溝で敷地を囲む程度の屋敷構とは一応区別し得る。しかし、木戸口に関しては館城においても山城のような虎口の発達は最後まで著しいものとならない。

*愛知学院大学大学院生

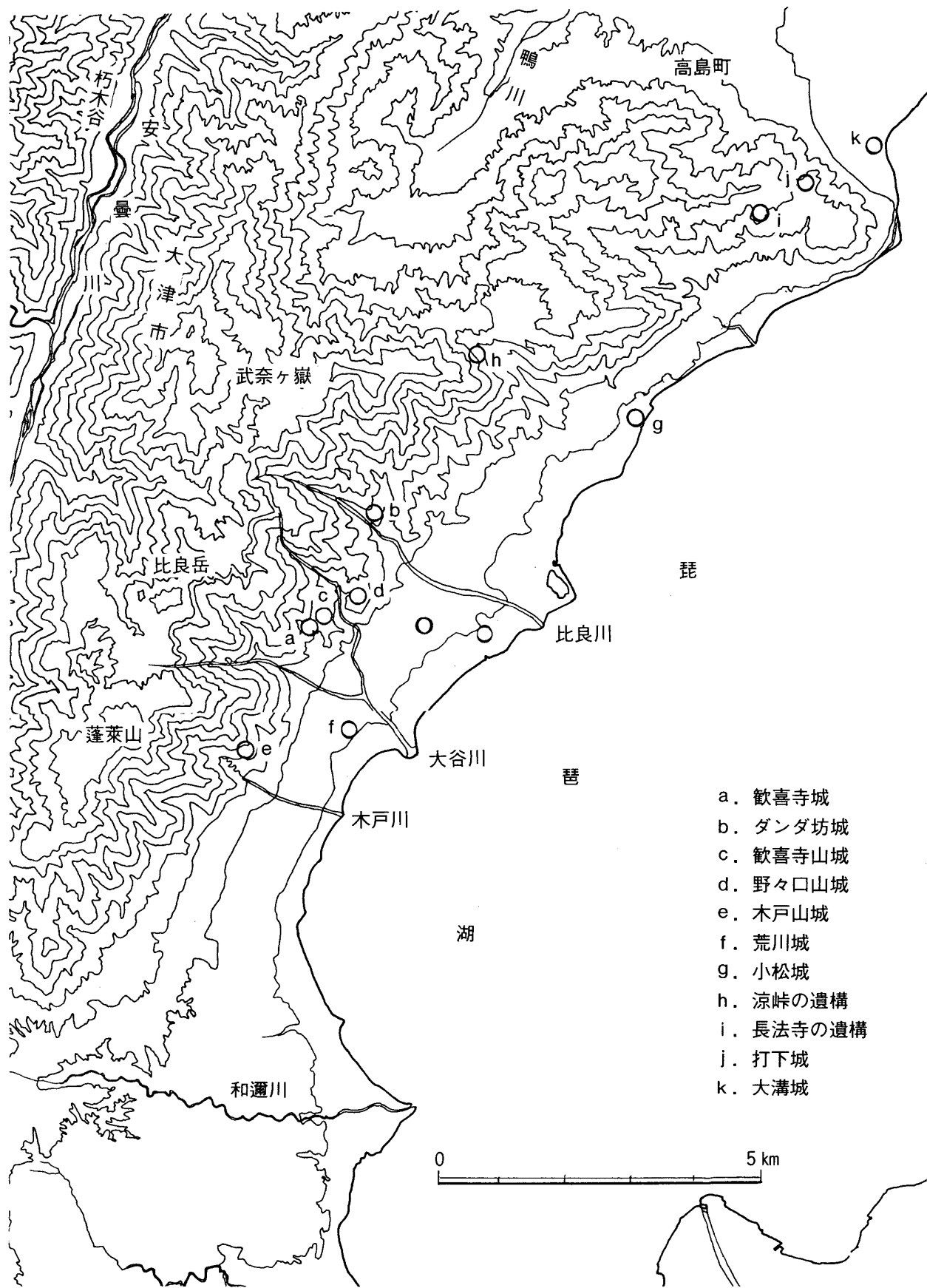


図1. 比良山麓の中世城郭群分布図

ここでは、小谷城址など山城と寺院遺構との関連がしばしば問題に出されていることから、山岳寺院の点在する比良山系を対象地として城郭の様子を探っていきたい。

2. 比良山系の城郭群

比良山系の中でも琵琶湖に面した、山屋根や山腹、山中、あるいは山麓部からその裾部をなす複合扇状地末端までを視野に入れて、中世城郭跡を摘出すると11遺跡を数える。

扇状地の末端、湖岸近くに認められる平地の館城は、在地の支配層である土豪層（地侍層）が、その土地支配のために拠点とした屋敷地であり、館城と呼んで単なる屋敷地と区別できたのは、土塁で囲み、その外側に濠を巡らすといった防御を備え、かつ、お館様と呼ばれる存在であったことによる。

他方、山城は地域によって相違のあるものの、平地城館址（館城）とセット関係をなして築かれる。平時における土地支配の拠点と戦時における詰めの城との対応関係を示すものである。もちろん、山城にはこれ以外にも、中核となる山城（主城）を防御する役目を担って築かれた城で、支城と呼ばれるものや敵城を攻め落とすために近接して築かれた付け城などがある。また、郭が小規模で通信機能が主体となるような山城は砦と呼ばれる。しかし、詰め城ではない山城においても、その守りに関する被官が山下に屋敷を構えてここに住み、戦時に備えた事例もあり、城主が具体的に判明せず、かつ一定地域に多数の山城が集中する場合、それを砦や支城あるいは主城などと即座に区分することは困難をとまなうことが多い。

また、平地の城館はすでに近世以降の開墾などで地形が大きく改変しており、多くのものが旧状をとどめない。具体的な構造などでは、城郭関連地名（奥城、奥屋敷、殿屋敷）や地籍図に残された地形の復元から館の存在を推測し、構造の復元にまで及んでいる。

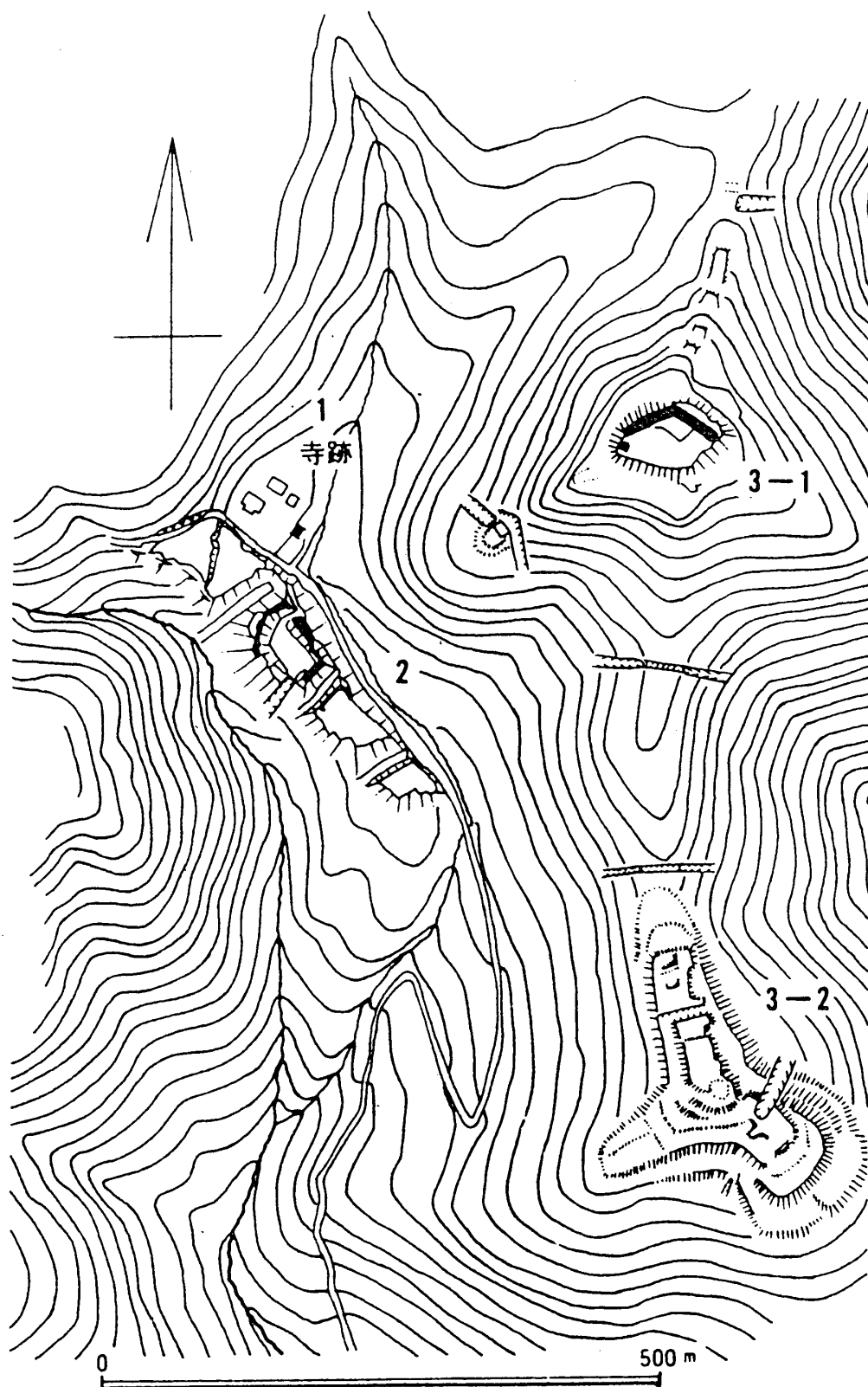
他方上記の作業と並んで、発掘調査によってその一部が判明（湖西では新旭町吉武城）したり、あるいは開墾を免れてきた段丘上の城館群（新旭町井ノ口館）から多くの示唆を得ることができる。

それらの調査成果によると、いずれも館城の実態は、単一の城屋敷からなるものではなく、多数の方形単郭の屋敷地が濠を共有しながら連結しており、序列化を正しく屋敷ならびとして示しているといつてよい（A類）。しかし中には、濠と土塁とを巡らす郭が中心部に一郭しかなく、他は溝で囲む屋敷地が窺われる程度のものである（武曾城がそれか。B類）。さらに局部的に空堀と土塁を備えた一郭のみが認められる例（長法寺の城郭遺構）もある（C類）。では比良山中・山麓での明確な館城もしくは、館城を想定するうえで有効な遺構はどのようなものであろうか。

a. 歎喜寺城

志賀町内のこの種（方形単郭結合型A類）の館城については、大字大物の歎喜寺城が参考となる。歎喜寺跡（薬師寺跡）の前面尾根筋上に築かれており、寺院との関連が伺われるばかりか、坊跡群が当初ここにも存在していたとみなしても不思議ではない位置関係にある。

遺構は、北から幅12m、深さ5.5m、長さ28m、および幅10m、深さ5.0m、長さ20m、さらに幅14.5m、深さ8.5m、全長28mの3条からなる大規模な堀切によって尾根筋の遮断が行われ、この濠の間に2つの方形単郭が認められ郭部を確保する。北側の中心主郭は、濠と切り岸からなる周壁に囲郭され、郭部分の地盤掘り下げ方式（「半地下式穴倉様遺構」）にもとづいて形成されている。いわば切り残された「削成型」の土塁によって四方が防御される型式である。この内側の法面には石垣（6段）が認められ郭部を確保する。郭内の規模は東西15m、南北16.8



1. 歓喜寺 2. 歓喜寺城 3-1.3-2 歓喜寺山城

図2. 歓喜寺城と歓喜寺山城

(『滋賀県中世城郭分布調査報告9』1992年3月)
(滋賀県教育委員会 再トレースによる改変)

mを測り、その面積はおよそ252m²である。土塁の高さも北側の自然尾根の上部からみておよそ6.0mを測り、東側で3.2m、南側で2.0m、西側で6.0mであった。

中心主部の入口は土塁に沿っての通路から屈曲して、直に木戸口を経て郭に入るもので喰い違い虎口などはない。また濠を共有して南に接する第2郭は北辺に低土塁が残り、郭の規模は南北24m、東西18m、およそ432m²である。郭への入口は、北から南へ土塁脇の通路を経て、右へ屈曲して階段を上り郭に達するが、複雑な虎口ではない。

また、南・北の濠を隔てて平坦地が認められるが、城館の形成によって削り残された坊跡群の一部ではないかとも思われるか定かではない。つまりここでは立地と郭の数こそ違え、先に述べた新旭町の平地城館群と同一形態である。歎喜寺の境内の一面に、先行して存在した坊跡を大幅に要塞化するに際して、平地城館の築成手法を取るものであった。「方形単郭(Bクラス)掘・土塁持ち結合型・二結型・城館」と称するものとみなすことができる。

本来平地城館として山麓裾部に存在すべきもの、もしくは存在していたものがこのような比高差200m、海拔300mといった山中に立地することになった背景には、この寺院経営にも深くかかわりをもった、また山中寺院へ詰城を求めた在地土豪の湖岸近くの姿が直接この寺院の境内地へ投影された結果ではなからうか。つまり、平地における屋敷地で(館城)で示された「屋敷構」と「屋敷ならび」の構成が身分関係、権力関係の標章としてそのまま寺院支配の中に持ち込まれたものと考えられる。

ゆえに山岳寺院に築造された館城の立地や規模、形態によって、寺院経営における在地土豪とのかかわり合いや、両者の力関係を読み取ることができるのではなからうか。

同じ比良山麓に立地する山岳寺院であるが、ダンダ坊遺跡(坊跡群)に窺える城館はまたその様相が歎喜寺と異なる。

b. ダンダ坊城(庭園館城)と長法寺の遺跡

ダンダ坊遺跡は比良山中の山岳寺院のなかでも、高島町鷓川に所在する長法寺跡に比肩する屈指の規模を誇るものである。長法寺跡の坊跡数およそ15箇所に対して、ダンダ坊遺跡のそれがおおよそ24箇所にのぼることからもこのことが首肯される。

また、長法寺本堂跡の基壇規模が、20×15mで、高さ50cm、建物規模が7間×4間(17×11m)あったのに比して、ダンダ坊遺跡のそれは、基壇規模14×14m、高さ25cm、建物規模10×10mであったことからこのことは充分うかがわれる。

また、坊跡数や寺域の規模(ダンダ坊遺跡:77500m²、長法寺跡:7280m²)が大きいだけでなく、その寺院立地(占地)もまた、風水思想にのっとった寺院構成をとり、占地に関して最高の配慮が窺える。この点からだけでも、これら二寺院が、比良の山岳道場のなかで中心的役割を担っていたであろうことが推測できる。なかでも長法寺跡は、正面本堂と参道、これに取り付く左右の寺坊跡群といった「寺構」の構成を全うしている。他方、ダンダ坊遺跡にあっても、正面の本堂、それに取り付く表参道といった構成をとるが、この参道は地形に制約されて短く、かつ山麓には左右に寺坊を配するとはいえ、その参道も紆余曲折して大きく地形に沿い、整然とした寺院配置といった箇所は部分的である。

このような大規模寺院にもその一角に「寺構」とは認め難いものがある。それは「屋敷構」にちかいが、局部において「城構」をみせるもので、異質なものがうかがえる。

長法寺跡では、谷底に潜むように寺坊が並びその谷奥に本堂を構えるといった構造であるが、「館城」の「構」をとる城郭箇所は、西側背後の南北尾根筋上に築かれており、寺坊とは全くの地続きである。寺坊が標高340mを中心に伽藍を持つが、館城跡は標高370mに位置している。

ここからの眺望は極めてよく、眼下に琵琶湖を一望出来る。立地は寺坊群の建ち並ぶ谷底とは対称的である。

しかし重要なことは、このような立地をとるからといって、この「館城」が、明確な山城や砦といった「城構」をとらないことである。つまり、この「館城」には、通常山城遺構として不可欠な、堀切や堀切縦堀が認められないのである。

遺構は、谷筋に面した西側前面に、長さ43.5m、幅2.5m、深さ0.6mの空堀ともいえない規模の空溝を配し、所々に石積みが残存する。当初は溝の両側に石垣を積み、強固な構かまえを示していたものと思われるが、その石垣が半ば崩壊している。空溝の北寄りからは、土橋を経て郭に入るが、幅5mの通路は左から右へ緩く屈曲し、内部が見通せない虎口様木戸をなす。また通路の左右に巨石を配している。郭の規模は東西40m、南北30m、面積にしておよそ1200㎡を測る。南側、琵琶湖に面しては幅2.0m、高さ1.0m、長さ30mの土塁が認められるが、この辺の3分の2程のみ構築されていて他辺には無い。

たしかに、前面の横堀ならぬ溝の存在、そして一部土塁が認められたものの、「屋敷構」を僅かに要塞化した程度で、到底山城や砦の構築にはおよばなかったことが判明する。むしろ平地館城の完結しない段階のものが山稜上に営まれた感が強い。

一方、ダンダ坊遺跡は、標高310mに位置し、金糞峠から武奈岳に至る正面入口に面する。このダンダ坊遺跡の山麓坊跡群の尽きた北西端、本堂跡から直線距離にしておよそ341mで、標高335mに問題の郭が認められた。

山麓の坊跡群を縫うように延びる山道が、右手に坊跡群を連ねていよいよ最後の平坦部にさしかかると、両側から石垣に挟まれたまま右へ左へと屈曲して郭に入る。

前面は、この坊跡に多数類例の見受けられる石垣と櫓をのせる石塁およびそれに挟まれた虎口といった要塞型の「構」を示し、郭を隔てての背後には長さ18m、幅9.5m、高さ3.2mの土塁が幅3.0m、深さ1.0m、長さ11mの空溝を伴い、「館城の構」を示す。しかし、この屋敷は背後の山腹からは内部が見通せるし、そこに堅い防御は窺えない。むしろ無防備の屋敷に、平地城館の「構」や山城の構を部分的に採用したものであることが判明する。

内部入る木戸は幅2.4mで、全長10mである。虎口正面の石垣の高さはおよそ3.0mであった。また郭は東西20m、南北30mで、その平面積はおよそ600㎡であった。

庭園館城と名付けたのは、この郭の奥寄りに、土塁を借景とした庭園が認められるからである。

滋賀県下で庭園を持つ山城、館城は限られている。著名なものでは佐々木京極氏の居館である伊吹町上平寺城下での虎石である。巨石を中心に池庭が広がる。その郭の規模はおよそ1200㎡である。

しかし、近江の守護大名である佐々木六角氏の居城・観音寺城や戦国大名浅井氏の小谷城では、明確な庭園遺構は明らかにされていない。

他方、朽木氏の居館内に築成された「秀隣寺庭園」が国史跡として著名であるし、同じ朽木谷におそらく同氏の屋敷と思われる所でも庭園遺構が知れる。

おおよそ室町時代あるいは戦国期に属する庭園など類例の乏しいものであるが、それだけにこのダンダ坊の一角のそれも「館城の構」を持つ郭に庭園を築いていたことは、この館主の性格を想定する場合に興味を引く。

さきに長法寺跡の「館城の構」や歎喜寺での「平地城館構」で触れたように、ここダンダ坊での館城構の主もまた、その遺構の様相から判断して、この寺坊の経営に深く関わった在地の

領主であり、僧であり、文人であり、かつまた、地侍層であると予想される。

以上に触れてきた山岳寺院に抱撰もしくは接する位置関係にあった「館城構」の城郭遺構は、寺院自体が谷筋の奥にあって、外界から望み得ない陰の部分に相当し、防御、攻撃、通信機能といった軍事面にはまったく欠けるものであった。築城の意図からは、その寺院を防御する側面よりも、寺院に寄生して肥大化した地侍層権力を象徴するかに思えるほどである。つまり寺院支配の為の館城かと穿ちたくなるものであった。館城構が、寺院全体に比してどの程度のウエイトを保持しているかは、あたかも寺院の衰亡と地侍層との興隆とを対比しているかのごとき感がある。

そして、この山間部の館城を実際に外敵から防御するためには、山麓・湖上を望み得る比良の山腹に突き出した山稜、山頂に砦を築かなければならなかった。その典型が次に述べる遺跡である。

c. 歎喜寺山城一坊から砦へ

歎喜寺跡に一部重なるように築城された城館は、すでに述べたように谷筋にあって視界はゼロである。ゆえ必然的に琵琶湖に面した山頂部が要塞化する。

歎喜寺山城は、標高374mを測り、谷間の歎喜寺跡の標高300mとは比高差74mある。この山頂からは湖上はもとより対岸まで、しかも180度の展開で望み得る。

山頂の遺構は、一見山岳寺院の修行者ネットワークを構成する山頂部坊跡と見なし得るもので、それとの区別は難しい。事実かつては寺坊が存在したとみる方が自然である。

山頂の平坦部は、菱形をなすが、30×25mで、およそ750㎡を測る。土塁は鈍角のL字形で、北側2辺を巡る。その長さ31m、幅7m、高さ2.0mで、西端に木戸口を設ける。また土塁に面して高さ0.5mで、11.5×8m、92㎡におよぶ基壇が認められる。ところが基壇外の平坦地・郭部分が西木戸の「しきみ」より低い位置関係となり、本来城構ではありえない。ここから当初この郭が寺坊のものであったことが主張し得るのであるが、最後まで寺坊であったというわけではないことから、この山頂から尾根筋を北へ下るとその鞍部に尾根筋を挟む浅く掘り凹めた堀切が認められ、かつまた、尾根を南へ下ると2条の堀切・縦堀が認められ、山城・砦説を決定づける。なお、西の尾根筋を下っても堀切・縦堀状遺構が認められる。また、南の尾根筋を下っても一つのピークに至るとやはり平坦地を築き、砦を設けたかと思われる箇所がある。その前面には堀切などなく、俄か拵えの砦跡かと推測される。

このように歎喜寺城も歎喜寺山城を擁して初めて軍事的意味合いを有したとみたい。

同じことは、さきのダンダ坊庭園城館においても次に述べるような野々口山城などを介してはじめて防御機能が発揮されたのであって、それ自体では戦闘、防御の機能は果たし得なかったと思われる。

d. 野々口山城

ダンダ坊遺構群を覆い隠す比良山麓の尾根筋のうち、左側の山尾根にあって、あたかも寺院入口を眼下に見下るといった位置関係に築造された山城である。この山城がさきの庭園館城と直接連携していたとは思われないが、他にも多くの砦があってそれらとの通信をも含めて深く関連していたに違いない。

標高399.5mの高所にあって、北から西側にかけて総延長81m、幅13m、高さ2.0mの土塁を巡らす。しかし、前面となる琵琶湖側には土塁の形跡はない。すでに崩落消滅した可能性もあるが、定かではなく、あるいは塀などを巡らしたのであろうか。平坦部・郭の面積はおよそ422㎡である。この山頂の遺構が、寺院関係の遺構ではなく山城たる根拠は、北東側につづく尾根筋

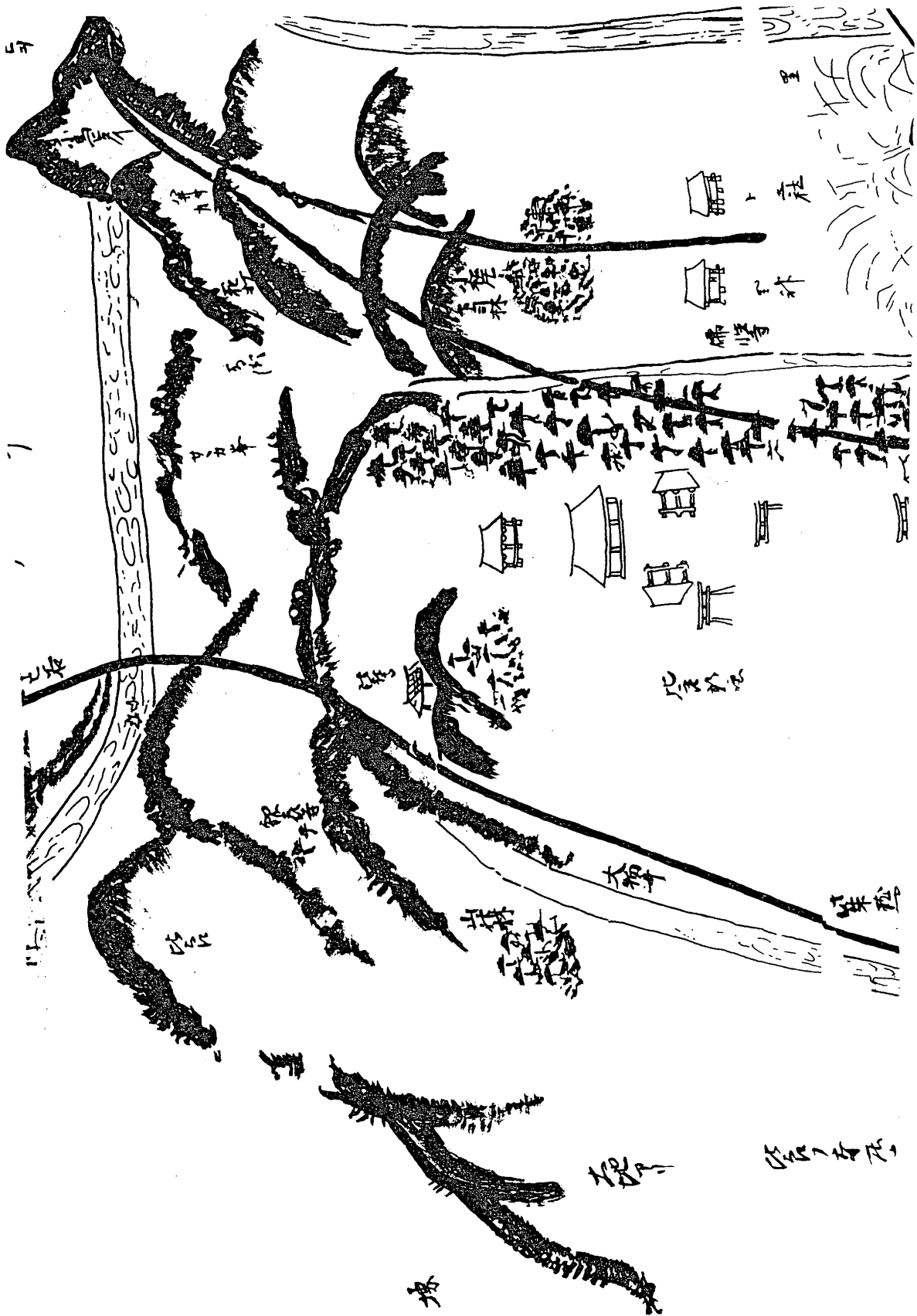


图3.「弘安3年近江国比良庄絵図」(伊藤晋氏所蔵(部分トレース))

が土塁の外で大きく2条にわたって堀切・縦堀によって防御されていることによる。土塁に接するそれは幅5.2m、深さ2.7m、長さ14mにおよび、また北の1条はおよそ3.5m隔てて、幅13m、深さ2.7m、長さ2.0mを測った。なおまた、南端には琵琶湖に向けて縦堀が1条あり、敵兵が前面へ回り込むことを遮っている。その幅5m、深さ1.3m、長さ18.5mで、紛れもなく典型的な山城・砦であることが知れる。ところが、この砦の所在地は、伊藤晋氏所蔵「弘安3年近江国比良庄絵図」(図3)によると、法喜(花カ)寺が描かれているのである。つまり、歓喜寺山城と同様に、この野々口山城もまた、中世の山岳寺院の坊跡を転じて砦に造作したものと判断することができる。

しかし、比良山麓の山城の築造は、これら2例のような山岳寺坊の改造といったものばかりではなかった。というのも、山岳寺院の発達する好都合の立地が求め得なかった地域、たとえば荒川や北小松においては、平地の地侍はその権力基盤の大小に応じて背後の山岳に詰め城を築くといった防御策が差し迫った課題としてあったからである。

e. 木戸山城

先の歓喜寺山城とは、大谷川を隔てて南に位置しており、JR湖西線志賀駅や樹下神社に向かって延びる比良山腹の急峻な尾根筋が、下降しながらも僅かに突出部をなす標高469.8m、比高差およそ380mの高所に築かれる。

主郭の背後に幅13m、深さ2.5m、長さ14mの大きな堀切を一条設け(今は変形してしまっているが、その名残りである)、山城の第一の要件を備えている。この堀切には現在、木戸川の谷底からつづら折りに登りつめ、比良山を経て大津市葛川へ抜ける山道が通る。

この山城の特徴の一つに、この堀切に面して武者隠しかとされる幅2.0m、深さ1.6m、長さ7.4mの溝状落ち込みが認められ、横矢がかかるように築成されていることである。この点からみて、当時からこの堀切が堀底道として、朽木谷へ抜ける通路の要所となっていたことが推測される。この山城の位置が異様に高所に所在することに関して、この山道との関係で考え合わせるとなすけるものがある。

主郭は、方形で、一辺15×9.0m、およそ135㎡の郭からなり、東面を除く三方に土塁を巡らす。土塁は総延長およそ39mで、幅3.0m、高さ1.9mを測る。主郭の回りには東の一角を除いて腰郭が巡り、その幅はおよそ2.4m前後である。また、西側の腰郭には外側切岸にそって低土塁の痕跡が残り、あるいは腰郭は横堀の形骸化したものとみなすこともできる。ちなみに腰郭を含んだ規模は32m×40mとなる。

虎口の形状は明確ではないが、背後の堀切から北東の腰郭へ入り、東角へ回って主郭に達したようである。

以上の様子から、この山城は、元来平地にあった館城と呼ばれる方形で土塁と外濠をもつ地侍の屋敷地をより要塞化したもので、遺構の系譜においても長法寺跡の館城構、あるいはダンダ坊での庭園館城をさらに完成させたもので、ひいては歓喜寺跡の館城遺構とも深く関わる性格をもつものであった。

この点から見て、木戸城の山下には、この城を詰め城とした、平地の城館が存在することを予測することが出来る。そしてまた、そのような平地城館址の存在が現実的に判明するのである。

f. 荒川城—平地城館址—

大谷川の右岸、集落を囲郭する石塁(シシ垣)の内側に、城郭関連地名「城ノ本」「北堀」「城之東」が遺存する。地名から予測し得る平地城館址の所在地は、万福寺の北東、「村ノ内」の北に位置する。この場所は、明治18年の絵図(荒川村総代堀平氏作図)にみえる「木戸十乗

坊越前守古城跡、本村中央ヨリ東北地ニアル」と符合し、「古城跡」が「北辺65間、東辺38間、南辺72間、西辺44間」の規模を有したことが知れる。

それぞれ117m、68.4m、129.6m、79.2mとなるが、これが土塁や濠を含む郭の規模を示すものか、あるいは一郭のみでの規模かなど定かではない。しかし、平地城館址の多くは、一町あるいは半町規模のものが多く、規模には一定の傾向が読み取れる。あるいはこの荒川城も郭の規模が長さ1町、幅半町で、まわりに濠や土塁が取り巻き、この郭自体も二分され複合形態であったかもしれない。たとえば歎喜寺城館が、南北110m、東西60m前後を測るのと符合する。そして木戸山城は、荒川城の複合の郭の内的一方をモデルに山上に築城したことになる。おそらく歎喜寺城館に対応する平地の城館址は、大谷川の左岸、大物あたりに埋没しているに違いないが、その規模が歎喜寺城館に類するとの想定はこのような事例によっている。やはり具体的にはなお定かではないが、北小松の小松城・伊藤氏城についてもいくつかの地名あるいは伝承があり、ここに平地の城館を想定することが可能である。

g. 小松城（伊藤氏城）—平地城館と詰城—

北小松はもともと比良山麓と湖岸が交わる平地の無いところであったが、そこへ流域の短い滝川が埋め残した内湖が良港を形成したに違いない。比良山山麓の港では数少ない船溜まりであったと思われる。

そのような港の掌握によって富みと権力を蓄えた地元の地侍層として伊藤一族が知れる。

伊藤一族の館城は、現在の北小松の集落内に重なっており、「民部屋敷」「吉兵衛屋敷」「斎兵衛屋敷」の伝承が館の構造を伝えている。それぞれの屋敷は元来濠と土塁で囲郭されていたらしく、小松郵便局前（東側）の道は堀を埋め立てたものであり、その向かいの「吉兵衛屋敷」の道沿には土塁が認められ、その上には櫓^{ケヤキ}が6～7本あったという。

現在も伊藤氏の子孫が屋敷地とする「民部屋敷」では、土塁がわずかに残存し、モチの木が植わっている。また、土塁には門があり、夜は跳ね橋を上げていたと伝える。ということはこの屋敷でも濠が土塁の外側を巡っていたことを物語る。また、「斎兵衛屋敷」は低地に囲まれた一段高い地形であったことから、やはり濠に囲まれた館城の構えをとったことが推定できる。

もちろんこれら屋敷地名は、江戸時代のものであろうが、この時代に至ってかつての濠を底浚することはあっても、あらたに濠を巡らし、さらには土塁を設けることは無いといってよい。この伝承と地形の名残から、すでに触れたような濠をそれぞれの屋敷地が共有して連結式の城館構をなしていたとみなしてよいと考える。このように想定してよければ、それぞれ屋敷割りには民部屋敷が半町四方、吉兵衛屋敷が30×50m、斎兵衛屋敷が25m四方と想定される。なお、さらに屋敷地が連結した可能性があるが、定かではない。しかし、館城の広がりは少なく見積もっても150×100m、15000㎡はあったと予測し得る。この規模でもって、歎喜寺城館（小さく見積もって110×35m、3850㎡）やダング坊（20×30mで600㎡）および長法寺の館城構（およそ30×40mで1200㎡）とを比較するならばそれらを凌ぐ構を小松（伊藤）城がとっていたことが判明する。

伊藤氏が浅井氏から感状をもらい受けたことがあるといった活躍とこの城館の規模は矛盾するものではない。ではこの小松城にとって不可欠な詰め城はどのようなものであったろうか。

h. 涼峠の遺構—小松城の詰城—

高島町の大溝（古）高島城が背後の打下城を詰城とし、荒川の荒川城が背後の木戸山城を詰め城としていたならば、小松城はどのような山城を詰城としたか。そこから伊藤氏の戦闘形態や防備の様子を探る手立てを得ることが可能なはずである。

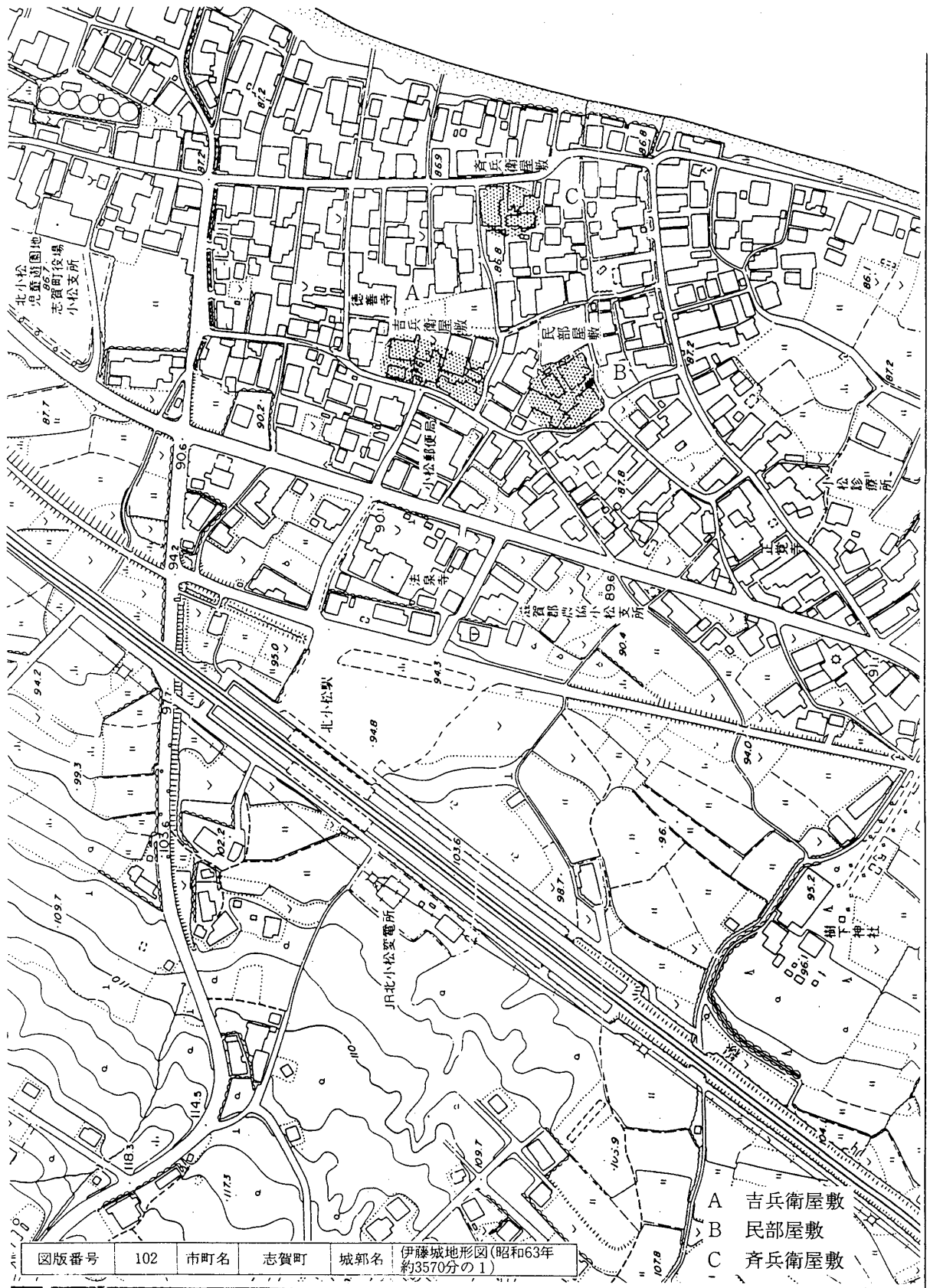


図4. 小松城(伊藤氏城)

(『滋賀県中世城郭分布調査報告9』1992年3月)
(滋賀県教育委員会による)

小松城の背後は、比良の山麓が真近に迫り、落下距離がおよそ142mにもおよぶ楊梅滝を生み出すほどの難所である。しかし、北小松のすぐ背後にも低い丘陵が琵琶湖に張り出し、展望もよく利くが、ここには民衆の逃げ場を思わせる小規模な平坦部は所々にあるが、詰城を思わせる遺構は見られない。

この足場の悪い滝の脇からの急峻な山道を登りきると標高510mの尾根筋に至るが、その最狭部に尾根筋を断ち切る形で1条の堀切が認められる。その幅およそ7.0m、長さ2.0m深さ1.0mでV字型をなす、小規模なものである。そして、この堀切から北へおよそ数十mで滝川に面して屋敷地が広がるが、山寺跡、あるいは山荘跡いずれとも決め難い。城館の構はない。しかし、この尾根筋を南東へ、およそ125mほどで広い鞍部へ出るが、ここに郭ほど明確な平坦部ではないが、明確な平坦地が認められ、この東を限る形であきらかに人工的な大土塁が一条認められる。その規模は長さ32m、幅12m、高さ3.0mで、決して郭を囲郭する格好のものではない。不自然なこの広がりはおおよそ28×11mで、308㎡に及ぶものであった。

完成されたものとは思えない遺構であるが、尾根筋の堀切から見て、城郭遺構と想定し得る。そして、その位置関係からして小松城の背後の詰城と評価したい。この箇所が眺望からしても申し分ないものであるが、それのみではなく背後の比良山中の遺構群（寒風峠の遺構など）との関連を考える必要もあるし、またこの山道が鴨川の上流である高島町畑や、さらには安曇川の上流である朽木谷などへ抜ける要路であったことも注意を要する。

3. むすびにかえて一平地城館と詰城一

農業生産の豊かな基盤など望めないのではと思われる比良山麓、それも北半地域で、その詳細は不明とはいえ、1～2の大字単位に一つといった程度に近い数で館城が築かれており、浅井氏の足下の肥沃な平野部とさほど変わらない館城分布率であった。

しかし湖北との相違は、これら館城がそれぞれ詰城を背後に構えたことである。湖北ではほとんど考えられないことであった。

また、その詰城もそれぞれが実に多様な形態をとることが注目される。

なかでも、最も典型的な立地、規模、形態をとる構の完備した木戸山城がある。

これに対して、あまりにもそれらしくない山城遺構に涼峠遺構がある。先をA類とすれば、これはD類であろう。

さらにこれら両極端に対して、寺坊地を占地して一部を館城構とした歎喜寺山城が存在し、寺院・歎喜寺の広義の境内地の一角を占めるものである（B類）。またこれに対して大きな寺坊は無いが、単独でかつ寺坊・山寺を占地、改良して城構とした野々口山城がある。寺院経営と不可欠のものとして築かれたとすれば、さきのB類と同一の範疇に属する。しかし、偶然の跡地利用となれば、A類に属し亜類となる。

B類は、比良山麓の地域的歴史的特徴を良く示すが、A-亜類もこの地域の山岳寺院あればこそといえる。しかし、さらにこの地域を特徴付けるC類を掲げることができる。

C類は、歎喜寺城やダング坊の庭園館城、あるいは長法寺一角の館城である。その共通点は、堀を巡らす方形の単郭の変形、もしくは濠あるいは堀を持つ複郭結合型の平地館城の構を山中の制約の中で踏襲したものである。

D類は本格的な城構を憚ったものであろう。城を構えること自体からくる独自権力の誇示、表傍は、両刃の剣として打倒すべき権力の対象とされるのであって、弱小の土豪が容易になせるものではない。涼峠の堀切や土塁は、伊藤氏の力の限界、あるいは権謀術数を物語るものと

いえようか。

このようにみてくると、比良の山城の大半が山岳寺院との関連で経営、維持された可能性が見て取れる。

ここに比良山中の城郭群の特殊性が浮上してきた。しかし、琵琶湖が天台薬師の池として近江の中心部を占めた以上、湖周辺の山並みにはすべからく山岳寺院が栄えたわけであるから、湖北においてのみB、C類の山城が築かれなかった理由は、もっと別のところで明らかとしなければなるまい。そこに浅井氏の徹底した「築城禁止令」が機能していたとみたい。

このような視点で浅井氏の足下を見渡す時、D類の存在が目につく。これらの点、及び書き残した問題は、今後稿を改めて論究したい。

〔記〕

小論を作成するにあたって『滋賀県中世城郭分布調査報告書9』（滋賀県教育委員会、1992年3月）を参照した。また、志賀町教育委員会社会教育課小熊秀明氏には調査に際してたいへんお世話になった。記して感謝の意を表したい。